ISSN 1345-3580

Glocal Tenri

月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.15 No.6 June 2014

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University

6

CONTENTS

- 巻頭言
  新しい教育システム
  ／深谷忠一 1
- 天理教教理史断章（81）
  近愛文書②
  ／安井幹夫 2
- 天理教伝道史の諸相（30）
  満洲、中国大陸、東南アジア、南洋への伝道
  ／早田一郎 3
- 「おふでさき」天理言語教学試論～「こと」的世界観への未来像～（2）
  庭園と化した「おふでさき」―「事」と「石」―
  ／井上昭夫 4
- 「おふでさき」の有機的展開（26）
  第四号：第三十首～第四十三首
  ／深谷耕治 6
- 新宗教のブラジル伝道（14）
  キリスト教の変容⑪
  ／山田政信 7
- 「いのち」をつなぐ―生死の現象（30）
  「いのち」について①
  ／堀内みどり 8
- 「襞のあわいに深く入り込んでいって…」をめぐって（15）
  襞のあわい――その火口⑮
  ／松田健三郎 9
- ノーマライゼーションへの道程（28）
  福祉のまちづくり⑮
  ／八木三郎 10
- ヴァチカン便り（8）
  列聖式
  ／山口英雄 11
- 図書紹介（82）
  『神話思考 II　地域と歴史』
  ／堀内みどり 12
- English Summary 13
- おやさと研究所ニュース 14

  第3回 Creative University Conference に参加（堀内みどり）／北海道でサンショウウオの繁殖環境調査を実施（佐藤孝則）／第270回研究報告会「アボリジナル・オーストラリアへの旅～中央オーストラリア・ラジャマヌへの調査旅行」（スティーヴン・ワイルド、土井幸宏）／若田光一さんと雅楽部とのコラボ／新刊案内／おやさと研究所「開講20周年記念・公開教学講座」のお知らせ

巻頭言

新しい教育システム

おやさと研究所長　深谷忠一　*Chuichi Fukaya*

現代社会の急速なICT（情報通信技術）の発達により、種々新たな教育の方法が提示され、高等教育のグローバル化とオープン化が進んでいます。

たとえば、アメリカのスタンフォード大学が2011年秋よりスタートしたネット上で同大学の授業を無料で受講できるクラスMOOC（ムークMassive Open Online Courses）には、世界の約190カ国の16万人が登録しました。そして、その後も、ハーバード大学、MIT、カリフォルニア大学など北米の有名大学が関連する複数の組織・機関が続々と立ち上がり、数百人の教員がMOOCの提供をしています。

また、イギリスのFuturelearn、フランスのFUN、ドイツのiversity、EUのOpenupEd、オーストラリアのOpen2Stud、中国のXuetangX、そして、日本の大学や企業が立ち上げたJMOOCなどの組織・機関も立ち上がり、オンライン授業のプロバイダーとしての活動を始めています。

また、オンライン学習と普通の授業を組み合わせた「反転授業」も、日本でも幾つかの先進的な大学・高校が取り入れ始めています。これまでの通常の授業では、教員が教室に出席した学生に知識の伝達をして、学生はその教室で得た知識についての展開・咀嚼を自宅でするというスタイルでしたが、それを逆にする。つまり、学生は自宅でオンラインでの講義やビデオで知識を吸収（予習）し、教室ではその学習内容を元にした討議や演習、実験を行うのです。

昨今では、知識はインターネットなどで簡便に手に入れることができ、個人がことさら物知りになる必要はありません。それよりも、知識を咀嚼・分析して、自らの考えを形成する力を養うことが重要で、「反転授業」はその為に有効な教育方法だというのです。

また、この他にも、個々の学生の習熟度に応じてオンライン授業を進める「反転授業」の発展型や、オンライン授業と他の電子ツールなどを組み合わせたブレンド型授業など、通信インフラの発達・デバイスの多様化による教育内容のオープン化と質の向上を目指す潮流が加速化されているのです。

京都大学（高等教育研究開発推進センター）の飯吉徹教授は、次のように述べています。

> 現在高等教育に迫りつつあるのは「百年に一度」か、あるいはそれよりも大きな「システムの抜本的作り替えの必要性」だ。…より複雑化・流動化した社会では、技術や知識の陳腐化は激しくなり…個々人が、知識的・技術的・職業的基盤を確保するために、10歳代後半から20歳代前半までの4年間を「壁に囲まれた」大学で過ごせば「高等教育は修了」というモデルは、明らかに機能しなくなりつつある。
>
> 日本の大学は、これまでの教育鎖国における「地場産業」として安穏とやり過ごしてきたことによる「ツケ」の返済のために、場当たり的な「自転車操業」に追われているように見える。…我が国の大学や高等教育が、自らを世界の中に位置付け然るべきビジョンを持っていないことほど危惧すべきことはない。よりグローバルなオープン化が進む高等教育に参入し、そこで積極的に学び、そこに新たな価値を持った還元ができなければ、我が国の大学はもちろんのこと、国家としての再興を図ることは難しい。（『カレッジマネジメント』185、11頁）

スマートフォンの無料アプリの利用率が10代で70.5%、20代で80.3%（2014年総務省調）という現実を前にすれば、“場所や時間の制限を受けずに、低価格で繰り返して学習できる機会を提供する”ということを、日本の高等教育機関も真剣に考えなければならないのは当然なことでありましょう。

また、これは、教団の教化育成の場面にも当てはまることで、ICTの進化を取り入れた新しい教化システムを構築し、囲いの中での一方向的な講義だけではなく、世界中の何処にいても、誰もが何時でも教えをオンラインで主体的に学べる環境をつくる。そうした教化システムのグローバル化とオープン化を、真剣に考えるべき時がきているのではないかと思う次第です。